

政策解説

# 「新専門医制度」はどのように向かうのか

## 新専門医を機構認定でなく学会認定の方針に

一般社団法人日本専門医機構(池田康夫理事長)が6月9日、2017年度からの「新専門医制度」は、機構認定ではなく「学会認定」とする方針を固めた。同日には社会保障審議会医療部会(永井良三座長)も開催され、制度実施の「延期」の決定はせず、「機構」や学会の検討や対応を見守る」としていた。

新しい専門医研修プログラムを用いるか、従来通りの形で専門医養成を行うか、機構の準備している専攻医登録システムを利用するかしないか、17年度からの専門医養成の在り方の選択が、基本診療領域の各学会に委ねられた。

**試行が延期か 議論激しく**

ここに至るまで、週間ほどの間に、同制度をめぐって激しい動きがあった。

5月30日、厚生労働省社会保障審議会医療部会「専門医養成の在り方に関する特別研修委員会・学会」(以下、専門医委員会)が、それぞれの役割分担を示した。専門医委員会は専攻医の「定員枠」を、17年度について過去3年間の採用実績に基づき、診療領域別・都道府県別・プログラム別に設定するとしていた。

各領域別研修委員会・学会は実質的なプログラム認定を担うとともに、都道府県からの定員増やローテート期間等のローテート方針の改善要望等の調整も担うとされた。

つまり、仕組みの中核を決するプログラム認定は学会が担うことで、日本専門医機構の役割は極めて限定されたものとされた。この提案に対し、委員からは「プログラム制を走らせること自体に反対」「試行してしまえば止まらなくなる」と、試行への反対意見もあったという。

永井委員長は「学会の意見を聞かなければならぬ」と、新専門医研修プログラムで実施するか、従来通りの研修プログラムで実施するか、次回合合までに学会にヒヤリングすると提案していた。なお、ヒヤリングの結果、17年度に新専門医研修プログラムで実施する学会が一部となる場合の定員設定等については未定である。

**日医と四病協は 延期求める**

6月7日には日本医師会と四病院団体協議会が緊急記者会見し、地域医療の観点から懸念が残るとされた診療領域のプログラム開始延期等を求めた。また文中には「すべての医師が専門医を取得するものではなく、女性医師をはじめとした医師の多様な働き方に十分配慮した仕組みとする」との要望も記された。

これを受ける形で同日、塩崎厚労大臣は談話を発表。要望の「趣旨を十分に理解」と述べた上で「医療関係者と機構と学会が協力して取り組みを進めるように求めている」とある。6月9日の医療部会で永井氏はこの大臣談話を引き、あくまでプロフェッショナルオートノミーで実施すべきと、医療部会が立ち入って延期を明言することを避けた形である。

**混乱のしわ寄せは 若い医師たちに**

「新専門医制度」の全面実施の可能性は潰れたといつてよさそうだ。しかし、学会によつては機構と協同し、試行といえるような実施に踏み出すところもあるという。何れにせよ、初期臨床研修を終え、来年度から専攻医研修を受けようとする若いドクターが混乱に直面させられている。何度も問題視されてきた身分問題についても、機構や医療部会が真摯に検討したとはいえない。

**進められる医師管理に注視を**

忘れてはならないのは、保険医定数制や自由開業規制等の医師コントロールの導入に向けた動きは引き続き進んでいるということだ。この間、新たな医師管理の仕組みづくりは、「新専門医制度」だけではなく「地域医療構想」との両面から追求されてきているのである。これを旨落としてはいられない。

6月3日、厚生労働省の医療従事者の需給に関する検討会(医師需給分科会)は正式な中間とりまとめを公表し、2040年に医師の需要と供給が逆転し余剰になるとの推計をあらためて示し、医師偏在対策として「保険医の配置・定数の設定」や「自由開業・自由標榜見直し」を提起した。しばらく「新専門医制度」をめぐる混乱は続くだろう。それに見え隠れしながら、医師コントロールの仕組みづくりは進んでいくはずである。国の思惑がどこにあるのか、いつも把握しておく必要がある。

※この内容については本紙92号4面「政策解説」医師需給推計と「偏在解消」で詳述している。ご参照されたい。

## 「挑戦」していく心構えを

### 接遇マナー研修会開く

協会は、4月13日、14日の2日にわたり「新しく医療機関に動かれた方の研修会」を開催。有限会社アミスの協賛で、のべ41人が参加した。1日目は、元日本航空客室乗務員の茂木治子氏を講師に、接遇マナー研修を講習した。また2日目は、医療安全対策部会・林一資副理事長より「医療安全から見た医療従事者としての心構え」を、保険部会・種田征四郎理事より「知っておきたい保険基礎知識(請求留置事項)」について解説した。以下、接遇マナー研修の参加記を掲載する。

## 「受容」「共感」「傾聴」の姿勢で信頼を得る

緊要うじまクリニック 木村 禎子(中京西部)

この度の熊本地震により、被災された皆様は、心よりお見舞い申し上げます。私も一日も早い復旧をお祈りいたします。

この度、接遇研修を受、相手を手をそのまま受け入れ、相手の理解を与え、「あなた自身」を



グループワーク形式です。研修会

形作るの言葉は、医療現場だけでなく、対人関係をより良くするための秘訣といえますか、はっと気がつくことがあります。

我が子がまだ小学生だった頃、近江里人、中江藤樹の「五事を正す」ことをよく言っていた。また、マシユ・バド医学博士の「思い」は言葉にあらわれ、言葉は「身体」に影響し、眼差、聴(相手に寄り添って)、思(思いやりを持って)と誰に対しても日常のたしなみから、自分を正し「傾聴(傾きを傾く)を何よりの手だてとする」との教えです。中江藤樹は江戸時代に村人に教える「接遇」だと感じました。今一度振り返り、患者さんや職員の皆様がこの

他に茂木先生は、ご自身の体験談で「山途中に怪我をされた際の「心のこもっていない対応」「病院に行くとストレスが溜まる対応」などを、おもしろおかしく、分かりやすく話されました。ただでさえ辛いのに病院に行くと傷付いたり

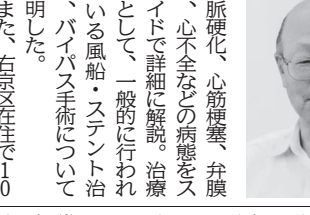
「参加型で、まずお隣さん同士、握手をして自己紹介をして下さい」。次に「4人のグループを作ってください」と言われ、これか何をするのか、辺りの人ほとんど人ななのだろうかとドキドキしましたが、時間が足りないうちに「コミュニケーションも取れませんか。気が付くと不安や緊張もほぐれ、みんな笑顔になっていました。

「私も医療の現場で今回学んだことを今一度深く振り返り、接遇「共感」「傾聴」の姿勢で信頼を得られるよう努力したいと思いました。そして、最後に茂木先生が「逃げる」のではなく「逃げる」のではなく「逃げる」を付けて何事にも「挑戦」していく心構えを持つ」とおっしゃっていました。

次回、7月7日(木)「乳幼児・小児の皮膚疾患や皮膚のメンテナンス」で、山田雄理事に講師を務めていただく。中途入学や単月(1回1000円)での参加も可能なので患者さんへぜひお勧めいただきたい。問い合わせは、協会事務局まで。

「心臓の動きと循環器系の仕組みをわかりやすく説明した上で、高血圧、心筋梗塞、狭心症、

「乳幼児・小児の皮膚疾患や皮膚のメンテナンス」で、山田雄理事に講師を務めていただく。中途入学や単月(1回1000円)での参加も可能なので患者さんへぜひお勧めいただきたい。問い合わせは、協会事務局まで。



講師の吉中理事

## 身も心も「しなやか」に

京都高齢者医学健康講座の第2講は、協会の吉中志理事が講師を務めた。テーマは「百歳の心臓・血管の話」で、出席は28人と

「心臓の動きと循環器系の仕組みをわかりやすく説明した上で、高血圧、心筋梗塞、狭心症、

「乳幼児・小児の皮膚疾患や皮膚のメンテナンス」で、山田雄理事に講師を務めていただく。中途入学や単月(1回1000円)での参加も可能なので患者さんへぜひお勧めいただきたい。問い合わせは、協会事務局まで。